

# マヌエル 1 世期 (1495-1521 年) における ポルトガルの香料交易

——マラバル地方の商館活動を中心に——

金 七 紀 男

は じ め に

すでに 1551 年スペインの年代記作家フランシスコ・ロペス・デ・ゴマラは、*Historia General de las Indias* の中でイベリア人による東インドと西インドへの航路発見は世界の創造以来最大の出来事であると述べたが<sup>1)</sup>、2 世紀後、フランス人ルナール師、スコットランドのアダム・スミスによって東インド航路の発見はアメリカの「発見」と並んで世界史上もっとも重要な事件<sup>2)</sup>とされ、この「地理上の発見」とそれに続く「商業革命」は世界の一体化とヨーロッパの優位を導く契機になったと理解されてきた。

わが国でも大塚久雄氏は、新大陸の銀、ヨーロッパの工業製品（とくに毛織物）とともに、いわゆる三角貿易の一角をなす東邦の香料を喜望峰経由で海路輸入することを可能にしたポルトガル人のインド航路発見とその香料独占の意義を強調し、「東邦貿易の新たな担い手として登場したポルトガル商人はたちまちにして地中海沿岸のイタリア都市、殊にヴェネツィアの商人を圧倒し去り、それに応じてポルトガルの商都リスボンがヴェネツィアに代って『東邦の物産』の中心市場になった<sup>3)</sup>。」と述べている。

しかしながら、同じ頃オランダ人ファン・ルールは「ポルトガルの東洋進出に対する過大評価」に異議を唱えた<sup>4)</sup>。近年、インド・グジャラートの支配者集団とポルトガル商人の関係について研究した M. N. ピアソンは、アジアにおいてグジャラートでのみとは言えポルトガルの貿易支配体制が成功寸前までいったのはポルトガル人の海上貿易が当地の支配者によって「許されていた」からである<sup>5)</sup>として、逆にポルトガルの支配の弱さ、限界を浮き彫りにしている。

他方、ケープ・ルート開設によるヴェネツィア経済破局論という 19 世紀初頭にドイツ人歴史家たちが唱えはじめて以来の通説<sup>6)</sup>も、1915 年 A. H. リバイヤーの研究によってその信憑性がその根底から大きく揺すぶられた。彼は、いわゆるレヴァント交易の衰退は長期の低落傾向であって、たしかにケープ・ルートによって中東経由の胡椒と絹の輸入は減少しているが、他の商品の輸出入はいささかも低下しておらず、1600 年ころまでレヴァント交易の総額は依

然としてケープ・ルートのそれを上回っていることを明らかにした<sup>7)</sup>。

さらに、1940年 F. C. レインは、地中海を経由する胡椒交易の衰退も考えられていたほど「電撃的」なものでも完全なものでもなく、ヴェネツィアの海上交易は引き続き活発であったことを実証した<sup>8)</sup>。ポルトガルでも、V. M. ゴディニョはポルトガルの海外進出がレヴァント交易の存続に決定的な影響を及ぼし得なかったことを明らかにした<sup>9)</sup>。それどころか、16世紀後半、地中海経済がめざましい繁栄を遂げたことを見事に描いてみせたのは、1949年に出版された F. ブローデルの『フェリペ2世時代の地中海と地中海世界<sup>10)</sup>』であった。

ポルトガルはスペインとともに他のヨーロッパ諸国に先駆けて大航海時代を切り拓いたが、その海外進出は地中海商業圏の拡大の延長線上にあって中世的性格を色濃く残しており、近代ヨーロッパ世界の形成は後発のオランダ、イギリスの北欧諸国によって準備されて行く。このように、ポルトガルが近世史上に果たした役割にはおのずと限界がある。

しかし、本国ポルトガルのアンシャン・レジームはこの海外進出とともに生まれ、ポルトガルの後進性、衰退論の問題もこの時期にまで遡って論議され<sup>11)</sup>、また近年わが国において「地理上発見の時代」が「大航海時代」と改められつつあるようにヨーロッパ海外進出の見直し、再検討が行なわれているという状況がある<sup>12)</sup>。

本稿は、このような状況を念頭におきながら、ポルトガルの東洋進出初期のマヌエル1世の治世(1495～1521年)においてインド・マラバル地方のポルトガル商館が取り扱った香料の量、本国から受取った香料買い付けのための対価物の品目・数量を明らかにすることを通じてマラバル地方におけるポルトガルの商館活動について考察する<sup>13)</sup>。

#### 註

- 1) Francisco Lopez de Gómarra, *Historia General de las Indias*, in C. R. Boxer, *The Portuguese Seaborne Empire 1415-1825*, London, 1969, p. 1.
- 2) J. H. エリオット『旧世界と新世界 1492-1650』(越智武臣・川北稔訳) 岩波書店, 1975年, 1-2頁.
- 3) 大塚久雄「近代欧州経済史序説」『大塚久雄著作集』2, 岩波書店, 1969年, 37頁.
- 4) J. C. van Leur, *Indonesian Trade and Society*, The Hague & Bandung, 1955, 永積昭『オランダ東インド会社』近藤出版社, 22頁.
- 5) M. N. ピアスン『ポルトガルとインド——中世グジャラートの商人と支配者——』(生田滋訳) 岩波書店, 1984年, 250頁.
- 6) F. Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen a l'époque Philippe II*, 1. 3<sup>e</sup> ed., Paris, 1976, p. 493.
- 7) A. H. Lybyer, *The Ottoman Turks and the Routs of Oriental Trade*, in *English Historical Review*, no. CXX, 1915, pp. 577-588.
- 8) F. C. Lane, *Venetian shipping during the Commercial Revolution*, in *American Historical Review*, vol. XXXVIII, Jan. 1933, pp. 219-239. *The Mediterranean Spice trade*, *American Historical Review*, XLV, 1939-1940, pp. 581-590.

- 9) V. M. Godinho, *A expansão quatrocentista portuguesa*, Lisboa, 1945.
- 10) F. Braudel, *op. cit.*
- 11) V. M. Godinho, *A estrutura na antiga sociedade portuguesa*, Lisboa, 1971, pp. 55-56.
- 12) 飯塚浩二「大航海の時代」『大航海時代 概説・年表・索引』（大航海時代叢書別巻），岩波書店，1970年，いしはらやすのり「世界史の『深さ』について——16世紀と『西インド』の投げかけるもの」『歴史学研究』440，1977年1月号。
- 13) 本稿の基礎資料は、「国王ドン・マヌエルの受領証」*Cartas de Quitação del Rey Dom Manuel* である。これは、ポルトガル国王マヌエル1世が在位（1495-1521年）中に国内外の財務官から受け取った金銭・物品の受取証書である。今世紀初頭、A. Braamcamp Freireによって *Arquivo Historico Portuguez*, vol. I-VI, VIII-X, Lisboa, 1903-1908 に収められている。この史料集はすでに、J. A. Goris, *Étude sur les colonies marchandes méridionales (Portugais, Espagnols, Italiens) à Anvers de 1488 à 1567. Contribution à l'Histoire des débuts du capitalisme moderne*, Lovaine, 1925. Manuel Nunes Dias, *O capitalismo português*, 2 vols., Coimbra, 1964. Vitorino Magalhães-Godinho, *L'economie de l'empire portugais aux XV<sup>e</sup> et XVI<sup>e</sup> siècles*, Paris, 1969 (ポルトガル語増補版 *Os descobrimentos e a economia mundial*, 2 vols., Lisboa, 1963-1971) にも利用されているが、本稿はマラバルの商館関係に限定して考察した。また、この論文を執筆するに際して、前記の Godinho の研究および浅田実『商業革命と東インド貿易』法律文化社，1984年から多くの示唆を得た。

## 第 1 章

### 第 1 節

ヨーロッパは遠く古代からアジアの香料を中東経由で輸入していたが、ポルトガル人が喜望峰を迂回して直接インドの胡椒産地に到達する 15 世紀末、インド洋を渡って陸上げされた香料は、①ペルシャ湾からアレッポを経由してバイルートに至る、②紅海からカイロを経てアレクサンドリアに至る、という 2 つのルートを通じて輸入されていた。この 2 つのスパイス・ルートを支配下に収めるムマルーク王朝はその通行税によって莫大な利益を得ており、東地中海の香料交易を独占していたヴェネツィアは、15 世紀にその最盛期を迎える。

しかしながら、その 15 世紀末ヴェネツィアに入荷する香料が極端に減少し、価格も急騰する。1497 年まで 1 hw 当り 42.5~48.5 ダカットだった胡椒価格は、2 年後の 1499 年には 80 ダカットと 2 倍近くにはね上り、1501 年には 131 ダカットまで急騰するが、その後ふたたび 80~100 ダカット台を維持する。丁子、肉豆蔻、豆蔻花も同じ傾向をたどる<sup>1)</sup>。

また、ヴェネツィア商人がアレクサンドリアとバイルートで買い付ける香料の量も、1496 年 6,550 コロ、1498 年 5,155 コロと漸減し、1499 年、1500 年にはトルコ=ヴェネツィア戦争によって買い取り量は皆無となった。翌 1501 年には 5,930 コロに回復するが、その後ふたたび減少し、1504 年には皆無となる。以後、1531 年までの年平均買い付け量は 1,010 コロと、15 世紀末の 6 分の 1 にとどまっている<sup>2)</sup>。

ヴァスコ・ダ・ガマの航海直前に始まるこの香料の価格高騰および輸入量の激減の原因は何によるものであろうか。ガマの『インド航海記』にはカリカットの胡椒価格は1キントル当り70ファナン、4.2クルザード、クランガノールでは3.3クルザード<sup>83</sup>という記述がみられ、また1500年第2次インド船団を率いたカブラルが現地で購入した香料価格は、胡椒4.5クルザード、肉桂4.9クルザード、丁子7.5クルザード、肉豆蔻5.6クルザード、豆蔻花5.4クルザード、生姜1.5クルザードであった<sup>84</sup>。そして、ガマの航海記にもカブラルの記録にも生産地での香料の収穫について異常を伝える記述がみられないことから、高騰、品不足の原因が産地にあるのではないことは明らかである。

原因のひとつは、近東の2つのスパイス・ルートを支配するムマルーク王朝の政治的混乱である。1496年にムマルーク王朝では王位継承問題から中央権力が統制力を失ったためスパイス・ルートが切断され、カイロのバザールは閉鎖されるに至った。

他方、香料を一手に牛耳っているイタリアでは、1495年からローマのマルテリ銀行を皮切りに、ヴェネツィアのモンテ・ヌオヴォ銀行が160万ダカットの負債を負って倒産し、その後も銀行の倒産が相次いだ。倒産の原因は、トルコ＝ヴェネツィア戦争とアゴスティノ・バルバリゴの帝国主義政策による公債の異常な増大によると一般に説明されているが、V. M. ゴディニョは、深刻な通貨不足が原因ではなかったかという仮説を出している<sup>85</sup>。

ゴディニョによれば、1480年代から地中海に流れていたスーダンの金が海路で直接生産地で取引しはじめたポルトガルのおかげで、金の入手が困難になり<sup>86</sup>、それと前後してヴェネツィアには銀の流入量も減少したという。レヴァントの政治的混乱、トルコ＝ヴェネツィア戦争によって香料価格が高騰したため、ドイツ人が香料買い付けを手控え、その結果ヴェネツィアへの銀の流入量が減少し、香料危機が生じたとされる<sup>87</sup>。そして、ヴァスコ・ダ・ガマによるインド航路発見がヴェネツィアの香料交易独占に大きな打撃を与えることになる。

さらに付言しておけば、ポルトガルの海外進出とオスマン・トルコの膨張を結びつける要因は全くなく、オスマン帝国がスパイス・ルートに介入するのは、1517年以降のことである。強いてポルトガルの海外進出と中東の動向を関連づけるとすれば、それはムマルーク帝国の動きであるが、この帝国もその繁栄がスパイス・ルートの支配にあることを熟知しており、キリスト教徒商人の商業活動を歓迎し、15世紀を通じて香料価格は安定していたのである<sup>88</sup>。

## 第2節

インド洋では古くから季節風モンスーンを利用した通商路が幾重にも通じており、ポルトガル人が初めて到着したころには、中国＝マラッカ、インドネシア＝マラッカ、マラッカ＝グジャラート、グジャラート＝紅海、マラバル＝紅海、グジャラート＝オルムスがその主な国際貿

易ルートであった<sup>9)</sup>。そして、これらの通商路を束ねる、西のオルムスと東のマラッカがインド洋の二大商業拠点であった。

その担い手を見ると、15世紀末にはアラブ商人はかつてのようにインド洋全域を支配しておらず、東インド洋は同じイスラム教徒でもグジャラートのインド商人が優位に立っていた。イスラム商人は、ことにインドの西海岸では富裕なヒンズー教徒の商人やラジャたちと相互の信仰を尊重しつつ緊密な関係を維持しインド洋の交易を独占していたので、アジアに進出してきたポルトガル人は平和的な競争ではイスラム商人には到底たうちでできず、その交易独占を破るには武力しかないことを悟った<sup>10)</sup>。

こうして、1503年から組織的な武力介入を開始したポルトガルは、カリカットに占領されていたコーチンを奪回し、コーチン王と条約を結んでここに要塞を築き、商館を作って初期香料交易の拠点とした。ポルトガルのインド洋進出の詳細は先学の研究<sup>11)</sup>に譲るとして、ここではマラバルの商館活動に必要な最小限の記述にとどめる。

1505年フランシスコ・ダ・アルメイダは30隻からなる大艦隊を率いてインドに渡った。彼はコーチンを首都としてインド帝国 Estado da Índia を建設し、初代インド総督に就任するとともにコーチン王をポルトガル王の名の下に戴冠させ、その保護国とした<sup>12)</sup>。さらに、1509年ディウ沖でグジャラート＝エジプト＝カリカット連合艦隊を破る。「これはポルトガルが16世紀にアジアで行なった海上における最大の軍事行動であって、これ以後ポルトガル艦隊とインド諸国との間には本格的な海戦は二度と行なわれなかった<sup>13)</sup>。」

アルメイダに代ってインド総督に就いたアルブケルケは、1510年3月ゴアを征服、翌11年にはマラッカを攻略してモルッカ諸島進出への足がかりをつくり、1515年には西インド洋交易の拠点オルムスを征服した。こうして、ヨーロッパの進んだ軍事力を背景にインド洋の制海権を握り、貿易独占体制<sup>14)</sup>を確立した。しかしながら、ついに紅海の要衝アデンを支配下に取ることができなかったことは、アルブケルケのインド洋支配計画に点晴を欠くものとなった。この結果、16世紀後半からこの紅海＝アレクサンドリア・ルートを通じて再びアジアの香料がヴェネツィア人のもとに流れ込むようになり、地中海世界は再び活況を呈することになる<sup>15)</sup>。

### 第3節

ところで、ポルトガル人がインド洋に進出した当時、アジアの香料生産量はどの位であったのであろうか。それを知る最良の資料は、同時代にアジア各地を旅行したポルトガル人トメ・ピレスが1512年から1515年にかけて著した『東方諸国記<sup>16)</sup>』である。この著作は事実をありのまま記述したきわめて正確な記録とされ、大方の識者から高く評価されている<sup>17)</sup>。

まず、香料の代表である胡椒について見ると、アジアにおける二大生産地はインド・マラバ

表 I アジアの香料生産量 (1500~1520 年)

		キ ン タ ル	キ ロ グ ラ ム
胡 椒		144,400-168,800	7,422,160- 8,676,320
肉 桂		3,000	154,200
丁 子		20,000- 28,000	1,028,000- 1,439,200
生 姜		6,000	308,400
肉 豆 蔻		24,000- 28,000	1,233,600- 1,439,200
豆 蔻 花		2,000- 2,400	102,800- 123,360
合 計		184,400-215,200	9,478,160-11,061,280

ル地方とスマトラ島で、年間生産量はマラバル地方 2 万バール、スマトラ島は 1 万 4000~2 万バール、その他にシャム 1,100~1,200 バール、スンダ島 1,000 バール<sup>18)</sup>で、合計 3 万 6,100 バールから 4 万 2,200 バール、キントルに換算して 14 万 4,400 から 16 万 8,800 キントルとなる。

丁子は、モルッカ諸島だけに産し、香料の中でも肉豆蔻、豆蔻花と並んで高級品として扱われるが、テルナテ、ティドレ、モウテル、マキエン、バシヤンの 5 島で年間 5,000 バールから 7,000 バール、キントルに換算して 2 万キントルから 2 万 8,000 キントル生産される。ピレスによれば、モルッカでは「マラッカで 500 レアルで買うことのできる商品で 1 バールの丁子を買える<sup>19)</sup>。」

肉豆蔻、豆蔻花はバンダ島の特産で、前者は年間 6,000~7,000 バール (2 万 4,000~2 万 8,000 キントル)、後者は 500~600 バール (2,000~2,400 キントル) ときわめて少ない。豆蔻花は肉豆蔻の 7 倍の価値があり、対価物によるが、原地<sup>20)</sup>では 1 バール当り 3~4 クルザードで取引される。

生姜の主産地はマラバル地方で、ピレスはその生産量を 2,000 キントル<sup>21)</sup>としているが、ゴディニョはインド全体での生産量は 6,000 キントルを確実に越えている<sup>22)</sup>としている。

肉桂はセイロン島の特産で、14 世紀以来世界市場を支配していた。ピレスは 1 バールが 1 クルザード<sup>23)</sup>であると、価格を挙げるのみで生産量については何も述べていない。ゴディニョは、同島の生産量は 16 世紀前半、3,000 キントルを越えなかったろうと推測する<sup>24)</sup>。

以上の数量を加算すると、16 世紀前半アジアにおける胡椒、肉桂、丁子、生姜、肉豆蔻、豆蔻花の香料生産量は、18 万 4,400 キントルから 21 万 5,200 キントル、トン数に換算して、約 9,500 トンから 1 万 1,000 トンの間となる (表 I)。

## 註

1) V. M. Godinho, Le repri venitien et egyptien et la route du Cap 1496-1533, in *Eventail de*

- l'histoire vivante, hommage a Lucien Febvre II*, Paris, 1953, p. 289.
- 2) *Ibid.*, pp. 287-288. 1 コロは 20 カンタロ, 1 カンタロはほぼ 1 キンタルに等しい.
  - 3) 「ドン・ヴァスコ・ダ・ガマのインド航海記」『航海の記録』(大航海時代叢書 I) 岩波書店, 1965 年, 419 頁.
  - 4) William B. Greenlee. *The Voyage of Pedro Álvares Cabral to Brazil and India*, Hakluyt society, 1938, Kraus Reprint, 1967, pp. 52-94.
  - 5) V. M. Godinho, *Reperi venitien*, p. 286.
  - 6) 15 世紀におけるポルトガルの西アフリカ進出とスーダンの金の関係については, 拙稿「中世末におけるスーダンの金とポルトガル」『東京外国語大学論集』31, 1981 年, 299-315 頁を参照.
  - 7) V. M. Godinho, *Reperi venitien*, p. 286.
  - 8) V. M. Godinho, *A economia dos descobrimentos henriquinos*, Lisboa, 1962, pp. 66-67.
  - 9) ピアスン, 前掲書, 14-15 頁.
  - 10) Boxer, *op. cit.*, p. 46.
  - 11) ジョアン・デ・パロス『アジア史』2 卷(大航海時代叢書 第二期 2・3, 岩波書店, 1980-1981 年. 生田滋「大航海時代の東アジア」『西欧文明と東アジア』(東西文明の交流 5) 平凡社, 1971 年, 19-144 頁. ピアスン, 前掲書.
  - 12) Fernão L. de Castanheda, *História do Descobrimento e Conquista da Índia pelos Portugueses*, 4 vols., Lisboa, 1551-1561, Liv. II, cap. XX.
  - 13) ピアスン, 前掲書, 49 頁.
  - 14) この貿易独占体制については, ピアスン, 前掲書, 53-82 頁. 参照.
  - 15) F. Braudel, *op. cit.*, p. 495.
  - 16) Tomé Pires, *Suma Oriental que trata do Maar Roxe ate os Chins*, 『東方諸国記』(大航海時代叢書 V), 岩波書店, 1966 年.
  - 17) わが国でも山田憲太郎が『香料の歴史——スパイスを中心に』紀伊国屋新書, 1964 年. にこのトメ・ピレスをもとにアジアにおける香料の生産量が算出されているが, 誤植によるものか一部に単位の取りちがいがみられる.
  - 18) トメ・ピレス, 前掲書, 182, 216, 219, 262, 269 頁.  
パールは南アジア, 東南アジアの重量単位である. 地域によって量目は異なるが, 西アジアでは 1 パールはラクダ 1 荷分に相当する. 浅田実, 前掲書, 75 頁, 注 42. 本稿では 1 パールを 4 キンタルとして計算する. キンタルはポルトガルの重量単位で, 1 キンタルは 51.4 キログラム. 16 世紀におけるアジア各地の度量衡については, António Nunez, *Livro dos pesos da Yndia, e assy medidas e mohedas*, 1554, in *Collecção de Monumentos Inéditos para a História das Conquistas dos Portugueses*, Tomo V. Lisboa, 1868, Kraus Reprint, 1976.
  - 19) トメ・ピレス, 前掲書, 359-360 頁.
  - 20) 同上, 351-352 頁.
  - 21) 同上, 182 頁.
  - 22) Godinho, *Descobrimientos I*, p. 520.
  - 23) トメ・ピレス, 前掲書, 186 頁.
  - 24) Godinho, *op. cit.*, p. 525.

## 第 2 章

## 第 1 節

1500 年 7 月、ガマの成功に継いでインドに向ったペドロ・アルヴァレス・カブラルは、マラバル地方最大の香料市場カリカットに商館を設置するという当初の目的を達成することはできなかったが、コーチンとカナノールで 2,000 キンタルといふかなりまとまった香料を買い付けるとともに、コーチンに最初の商館を設置することに成功した。以後、ポルトガルは毎年、喜望峰を迂回して香料を買い付けるための船団を送り出すことになる。

1 年に 1 回、インドに向う船団<sup>21)</sup>は、3 月ないし 4 月にリスボンを出発し、7 月に喜望峰を迂回してインド洋に入る。このインド洋では 10 月から翌 3 月まで北東の季節風が吹き、5・6 月から 9 月までは南西の風に変る。インド船団はこの南西のモンスーンを利用してインド洋を横断して、この風が弱まる 8 月後半から 9 月前半にインド西海岸に到着する。したがって、往路は通常、5 カ月から 6 カ月半かかった。復路は、香料を満載した船は、早ければ 12 月、通常は 1 月にコーチンを離れると、今度は北東季節風に乗って、2 月に喜望峰を迂回し、大西洋を北上すると、6 月中旬から 9 月中旬までにテージョ河口に入港した。帰路は、5 カ月半から 7 カ月半、長い時には 9 カ月も要したが、それは大西洋はインド洋と異なり、風向き、海流がきわめて不安定であるからである<sup>22)</sup>。

それでは一体、このインド船団はおよそ何隻の船舶で編成されていたのであろうか。年によって隻数は異なり、また研究者によってその数は多少異なるが、いま本稿の研究対象であるマヌエル 1 世の治世期すなわち 1497 年から 1521 年に限ってみると、船団を派遣した 23 年間

表 II インド船団の船舶数

年	隻	年	隻
1497	4	1511	6
1500	13	1512	12
1501	4	1513	3
1502	20	1514	5
1503	9	1515	13
1504	13	1516	5
1505	28	1517	7
1506	16	1518	9
1507	15	1519	15
1508	16	1520	10
1509	15	1521	12
1510	14		
		合 計	246

に合計 264 隻、年平均にして 11.5 隻出帆したことになる<sup>3)</sup> (表 II)、そして、この 23 年間においても前半の 1510 年までの 11 年間で平均 13.9 隻、後半の 1511-1521 年は 8.8 隻と前半期の方が平均して 5 隻多いことがわかる。しかしながら、もちろんインドに向った船がすべて帰国したわけではなく、一部難破した船もあるが、帰国しなかった船はインド艦隊に所属してインド洋の貿易独占体制維持の一翼を担った。

それでは、どの位の船が帰国したのか。この問題は、そのままヨーロッパに搬入された香料の量と関わってくる重要な問題である。出国した船舶に比較して帰国した船についての記録は少ない。ゴディニョの研究によれば、マヌエル 1 世期に限ってみると、1501 年から 1521 年までアジアを発った 120 隻のうち、111 隻、年平均して 5.5 隻の船が帰国している。同期間 (1500-1519 年) インドに到着した船舶は 218 隻であるから、帰国率は 50.9%、およそ半分である<sup>4)</sup>。

## 第 2 節

1502 年、再度インドに渡ったヴァスコ・ダ・ガマは、1503 年 1 月 3 日コーチン王と胡椒価格を決めた最初の条約を結ぶ。これによって 1 バール当り約 8 クルザード (1 キンタル当り 2.5 クルザード) とし、8 クルザードのうち 6 クルザードは金、2 クルザードは銅 (1 キンタル当り 12 クルザード) で決済されねばならないとされ、この条約は 16 世紀前半を通じて有効だった。この買い上げ価格に加えてコーチン王に対する関税 6%、荷上げ料を含めると 1 キンタル平均 3 クルザードとなった<sup>5)</sup>。ところで、1498 年ガマが初めてカリカットに到着した時点でのカリカットの胡椒価格が 1 ファラソラ当り 14 ファナン、つまり 1 キンタル当り 4.5 クルザード<sup>6)</sup>であったから、この 1 キンタル 2.5 クルザードという協定価格はかなりの割安と言える。

1502 年 2 月から活動を開始した商館では、商館長にディオゴ・フェルナンデス・コレイアが任命され、次期の商館長ロウレンソ・モレノが、アルヴァロ・ヴァスとともに書記職にあり、その他通訳 1 人、数人の召使いがつけられた<sup>7)</sup>。

この条約をもとにして、1503 年カナノール王との間にも条約が結ばれ、当地にも商館が設置された。新しい商館長にはゴンサロ・ジル・バルボーザが任命され、その他 2 人の書記、通訳 1 人など総勢 20 名の陣容となっている<sup>8)</sup>。さらに、この年、クィランにも商館が設置された<sup>9)</sup>。こうして、価格の協定と商館の設置によってマラバルにおける胡椒の買い付けは安定的となるが、本国では 1505 年 1 月 1 日、国王が香料および銀・銅の交易独占を決定するに及んで、国家機関としての各商館の役割は強化される。いまや、商館は単に本国から送られてきた通貨で香料を買い付ける単純な商取引から、本国から送られてきた商品で現地の通貨を買い付け、そ

れによって香料を購入する間接的な取引へ、さらには香料の購入を目的としない、より複雑な地域間交易へと進んで行く。

### 第 3 節

マラバルに設置された各商館の活動の実態を検討する前に、コーチン商館の例をとってその組織、人員構成およびその商業活動を支えるインド艦隊の軍事力について若干考察する。やや時代が下るが、シマン・ボテリョの『インド帝国台帳<sup>10)</sup>』によれば、1555年における商館およびそれを守る要塞の構成員とその年俸は次の通りである。

1. 長官	400,000	リアル
2. 商館長	120,000	リアル
3. 要塞員	100,000	リアル
4. 商館書記 (2)	40,000	リアル
5. 会計官	80,000	リアル
6. 同書記	40,000	リアル
7. 食糧監督官	20,000	リアル
8. 同書記	18,000	リアル
9. 倉庫監督官	20,000	リアル
10. 同書記	18,000	リアル
11. 計量官	60,000	リアル
12. 治安判事	100,000	リアル
13. 執達吏 (6)	15,000	リアル
14. 同護衛兵	3,600	リアル
15. 船舶・ドック守衛	30,000	リアル
16. 夜警	22,800	リアル
17. 牢番	12,000	リアル
18. 死体管理人	25,000	リアル
19. 要塞守備兵	38,760	リアル
20. 港湾長	50,000	リアル
21. 造船職工長	68,200	リアル
22. まいはだ職工長	32,568	リアル
23. 鉄工職長	37,200	リアル
24. ロープ製造職長	27,200	リアル

25. 樽製造職長	24,000 レアル
26. 造幣職工長	30,000 レアル
27. ドック雑役	18,000 レアル
28. 工事監督官	40,000 レアル

以上、合計 34 名に加えて、さらに付設されている教会には助任司祭以下 11 名の教会関係者がおり、その他、一般職人や民間商人がいたと推測される。商館長、同書記を含め直接間接商取引に携わる会計官、倉庫監督官、計量官ら合計 8 名のために 4 倍以上の人員を擁していることがわかる。

これら商館の安全を確保しインド洋の貿易独占体制を守るインド艦隊については、1525 年、時のインド総督ドン・エンリケ・メネーゼスが行なった装備と兵員の総点検によってその軍事力に関してかなり詳細に知ることができる。それによれば、インド艦隊はナウ船 (550 トンから 250 トン) 5 隻、ガレオン船 (300 トンから 80 トン) 11 隻、ガレ船 5 隻、ガレオッタ船 4 隻、バルガンティン船 4 隻、ナヴィオ船 9 隻、はしけ用のバルカラ船・パテル船 7 隻、パラウ船 (インド洋の小軍船) 27 隻、合計 72 隻と商船 (個人の所有も含め) 11 隻が記録されている。そして、それに装備される大砲類は 1,068 門を数えるが、それでも調書はなお 523 門の不足を挙げ、砲兵も 100 名、うち 50 名はドイツ人、残りはポルトガル人で補充する必要がある<sup>11)</sup>。

そして、この 72 隻からなるインド艦隊を維持するための兵員表<sup>12)</sup>は次の通り。

兵士	1,294 人
水夫	451 人
ラッパ手	18 人
鉄工 (ポルトガル人)	30 人
船大工 (ポルトガル人)	23 人
まいはだ工 (ポルトガル人)	36 人
銃手	204 人
樽製造人	15 人
砲手	150 人
合計	2,221 人

このリストには、他の要塞の守備兵、艦隊の乗組員は含まれていない。そして、鉄工、船大工、まいはだ工がわざわざポルトガル人と明記されていることは、他の兵士、水夫たちにインド人たちが多くいたことを示している。これから見ても、ポルトガルはインド洋に貿易独占体制を守るために多大の資力と人材を投入せざるを得なかったことがわかる。

## 註

- 1) このインド航海 (Carreira de Índia) については、リンスホーテン『東方案内記』(大航海時代叢書Ⅷ) 岩波書店, 1968 年, 補注, 760-764 頁参照.
- 2) Godinho, *Descobrimientos* II, p. 47.
- 3) Dias, *op. cit.* II, p. 117. ジョアン・デ・バロスは 251 隻 (『アジア史』I, 生田滋「解説」573 頁), Fortunato de Almeida は 230 隻 (*História de Portugal*, tomo II, Coimbra, 1925, pp. 433-437) としている. ゴディニョは, 10 年単位で扱い, 1500-1509 年 138 隻, 1510-1519 年 96 隻としている. *Descobrimientos* II, p. 48.
- 4) Godinho, *Descobrimientos* II, p. 49.
- 5) *Ibid.*, p. 42.
- 6) ヴァスコ・ダ・ガマ「インド航海記」419 頁.
- 7) Castanheda, *op. cit.*, Liv. I, cap. VI.
- 8) *Ibid.*, Liv. I, cap. XLVIII.
- 9) *Ibid.*, Liv. I, cap. LXI.
- 10) Simão Botelho, Tombo do Estado da Índia, in *Collecção de Monumentos Inéditos*, tomo V, pp. 18-23.
- 11) Lembranças de cousas da Índia, in *Collecção de Monumentos Inéditos*, tomo V, pp. 21-31.
- 12) *Ibid.*, pp. 10-11.

## 第 3 章

## 第 1 節

それでは一体、マラバルの商館はどの位の量を買付け、その対価物としてどのような品目をどの位の量ポルトガル本国から受け取ったのであろうか。われわれは、「国王ドン・マヌエルの受領証」によって、1502 年から 1519 年におけるコーチン、カナノール、ゴア、カリカットの 4 つの商館の商業活動がある程度知ることができる。ことに、コーチン商館については、1502 年から 1518 年までの 17 年間、ほぼマヌエル 1 世期をカバーしているので、この商館を中心に検討してみる。

1502 年 2 月から 1518 年 1 月までの 17 年間、コーチン商館には 5 人の商館長 Feitor が就任し、そのうちロウレンソ・モレノなる人物は 3 度、8 年 6 カ月にわたって在職している。彼らの任期は長いもので 5 年 4 カ月、短いもので 1 年 2 カ月と任期は一定していないが、平均すると約 2 年半となる。この間、彼らは様々の物資を購入しているが、その主体はあくまでも香料であり、その買付け量をまとめたのが、表 III である。上段は買付け量 (アロバ以下は四捨五入した)、下段はその推定額を示す。この表で、1517 年 1 月から 1518 年 1 月までの商館長ロウレンソ・モレノの欄が空白になっているのは、前任期の 1510 年 10 月から 1516 年 2 月までの分をまとめて 1 つの受領証で扱われているからである。

この 17 年間、コーチン商館は、胡椒 22 万 3,344 キンタル、肉桂 3,904 キンタル、丁子

表 III コーチン商館の香料買い付け量とその推定額

上段: キンタル  
下段: クルザード

商館長・任期	胡椒	肉桂	丁子	生姜	肉豆蔻	豆蔻花	合計	年平均
ディオゴ・コレイア <sup>1)</sup>	31,909	739	57	334	49	—	33,088	8,272
1502年2月-1506年1月	95,727	2,587	428	501	196	—	99,439	24,860
ロウレンソ・モレノ <sup>2)</sup>	26,432	536	132	172	32	44	27,348	13,674
1506年-1507年	79,269	1,876	990	258	128	330	82,878	41,439
アンドレ・ディアス <sup>3)</sup>	33,108	160	84	—	124	112	33,588	16,744
1507年12月-1509年12月	99,324	560	630	—	496	840	101,850	50,925
ディオゴ・ペレイラ <sup>4)</sup>	24,184	76	680	76	300	200	25,516	18,837
1509年10月-1511年2月	72,522	266	5,100	114	1,200	1,500	80,732	60,544
ロウレンソ・モレノ <sup>5)</sup>	29,908	2,187	1,584	—	2,149	1,216	100,044	15,391
1510年10月-1516年2月	278,724	7,655	11,880	—	8,596	9,120	315,975	48,611
ディオゴ・デ・ヴァスコンセロス <sup>6)</sup>	14,803	206	—	—	—	10	15,019	12,873
1515年11月-1517年1月	44,409	721	—	—	—	75	45,205	38,747
ロウレンソ・モレノ								15,391
1517年1月-1517年1月								48,611
合計	223,344	3,904	2,537	582	2,654	1,582	234,603	13,800
	670,032	13,665	19,028	873	10,616	11,865	726,079	42,711

2,537 キンタル, 生姜 582 キンタル, 肉豆蔻 2,654 キンタル, 豆蔻花 1,582 キンタル, 合計 23万 4,603 キンタル, 年平均にして 1万 3,800 キンタルを買い付けたことになる。これを見てもわかるように, 胡椒の買い付け量が圧倒的に多く, 全体の 95% を占め, 他の 5 つの香料はあわせて 5% にすぎない。

これらの香料の買い付け額はどの位であったのか。史料は量目を記するのみで, それに支払った代金は不明である。胡椒の価格は, すでに述べたようにコーチン王との協定で 2.5 クルザードと定められ, その他の諸経費を合せると 3 クルザードという数字が出てくるが, その他の香料価格については断片的な記録を頼るほかない。ゴディニョの記述をまとめると, 次のようになる<sup>7)</sup>。

- 胡椒 2.5~3.0 (3.0) クルザード
- 肉桂 3.5~5.5 (3.5) クルザード
- 丁子 6.5~10.5 (7.5) クルザード
- 生姜 1.4~2.5 (1.5) クルザード
- 肉豆蔻 3.0~6.9 (4.0) クルザード
- 豆蔻花 6.5~10.5 (7.5) クルザード

これらの記録をもとに、( ) 内の数値を標準価格として算出したものが、その推定額である。価格のはっきりしている胡椒が全体量の 95% を占めているので、年間平均の買い付け額は約 4 万クルザードとしても大きな狂いはないであろう。

香料のほかは、各商館長に共通する買い付け品は少ない。例として、第 2 期のロウレンソ・モレノの受領書から主なものを列記する。藍 (6 バール), 蘇芳 (112 バール), 安息香 (11 バール), 樟腦 (16 バール), 砂糖 (34 バール) などの、いわゆるドロガと呼ばれるもの、象牙 (112 キンタル), 真珠 (8 マルク), ルビー (41 個) などの宝石類、さらに馬 28 頭, 奴隷 25 人, その他、木綿、絹などの布地と多様であるが、いずれもその単価は明記されていないので、推算不可能である。

次に、カナノール商館を見ると、1503 年に就任したゴンサロ・バルボエザからエイトール・ロドリゲスまで 4 人の商館長の受領書が残されている (表 IV)。その期間は、11 年 3 カ月にすぎないため、統計も部分的にならざるを得ない。この期間に、胡椒 1 万 378 キンタル、肉桂 214 キンタル、丁子 125 キンタル、生姜 1 万 7,146 キンタル、肉豆蔻 85 キンタル、豆蔻花 1 キンタル、合計 2 万 7,949 キンタル (年平均 2,484 キンタル) を購入している。この商館では生姜の買い付け量がきわめて多く、胡椒の買い付け量 37.1% を大きく上回る 61.4% を占めており、カナノール商館では生姜が主な買い付け商品であったことがわかる。

ゴア商館では、商館長フランシスコ・コルビネルが 1510 年 11 月すなわちアルプケルケによるゴア占領直後から 2 年 9 カ月の断続期間を置いて 1521 年 11 月まで在職している (表 V)。この商館でも生姜が胡椒を上回っているが、全体量が 3,783 キンタルと微量で、インド帝

表 IV カナノール商館の香料買い付け量とその推定額

商館長・任期	上段: キンタル							合計	年平均
	胡椒	肉桂	丁子	生姜	肉豆蔻	豆蔻花	下段: クルザード		
ゴンサロ・バルボエザ <sup>9)</sup> 1503 年 -1505 年	65 195	—	116 870	1,432 2,148	—	—	1,613 3,213	54 1,071	
ゴンサロ・メンデス <sup>10)</sup> 1508 年 9 月-1512 年 12 月	8,972 26,916	109 382	9 68	11,066 16,599	45 180	1 8	20,202 44,152	4,753 10,389	
ペロ・オーメン <sup>10)</sup> 1513 年 -1516 年	388 1,164	32 112	—	4,648 6,972	40 160	—	5,108 8,408	1,703 2,803	
エイトール・ロドリゲス <sup>11)</sup> 1516 年 1 月-1517 年 1 月	953 2,859	73 256	—	—	—	—	1,026 3,115	1,026 3,115	
合計	10,378 31,134	214 749	125 938	17,146 25,719	85 340	1 8	27,949 58,888	2,484 5,234	

表 V ゴア商館の香料買い付け量とその推定額

上段: キンタル  
下段: クルザード

商館長・任期	胡椒	肉桂	丁子	生姜	肉豆蔻	豆蔻花	合計	年平均
フランシスコ・コルビネル <sup>12)</sup>	1,380	29	47	1,888	173	—	3,517	692
1510年11月-1515年12月	4,140	102	353	2,832	692	—	8,119	1,597
フランシスコ・コルビネル <sup>13)</sup>	208	—	46	—	12	—	226	84
1518年0月-1521年11月	624	—	345	—	48	—	1,017	321
	1,588	29	93	1,888	185	—	3,783	463
	4,764	102	698	2,832	740	—	9,136	1,119

表 VI カリカット商館の香料買い付け量とその推定額

上段: キンタル  
下段: クルザード

商館長・任期	胡椒	肉桂	丁子	生姜	肉豆蔻	豆蔻花	合計	年平均
ゴンサロ・メンデス <sup>14)</sup>	4,344	—	—	1,213	—	—	5,557	2,779
1513年10月-1515年10月	13,032	—	—	1,820	—	—	14,852	7,426

国の首都も香料交易地としての重要性はきわめて低かった。

残りのカリカット商館では、カナノールの商館長を務めたゴンサロ・メンデスの受領書が知られているだけで、しかも取扱った香料も胡椒 4,344 キンタル、生姜 1,213 キンタルにすぎないが、年間平均の取扱い量としてはかなりの量になる(表 VI)。

これら 4 つの商館の買い付け量、推定額は次の通りである。

胡椒 23 万 9,654 (年平均 1 万 4,097) キンタル: 71 万 8,962 (年平均 4 万 2,291) クルザード

肉桂 4147 (年平均 244) キンタル: 1 万 4,516 (年平均 854) クルザード

丁子 2755 (年平均 162) キンタル: 2 万 664 (年平均 1,216) クルザード

生姜 2 万 829 (年平均 1,225) キンタル: 3 万 1,244 (年平均 1,837) クルザード

肉豆蔻 2,924 (年平均 172) キンタル: 1 万 1,696 (年平均 688) クルザード

豆蔻花 1,583 (年平均 93) キンタル: 1 万 1,873 (年平均 698) クルザード

合計 27 万 1,892 (年平均 1 万 5,993) キンタル: 80 万 8,955 (年平均 4 万 7,586) クルザード

以上、マラバルの 4 つの商館は、1502 年から 1521 年の 19 年間に最低限、27 万 1,892 キンタル (年平均 1 万 5,993 キンタル) の香料を買い付け、80 万 8,955 クルザード (年平均 4 万 7,586 クルザード) を支払ったことになる。

## 第 2 節

次に、現地で香料を買い付けるために本国から送られて来た対価物を見てみる。それらは、通貨・貴金属をはじめ銅、水銀、鉛、珊瑚、布地など多様である。いま、各商館が共通に受け取った主な物資をまとめると、表 VII, VIII, IX, X のようになる。受領書には各商館長が受け取った物資の数量しか記載されていないので、下段にそれらの物資を現地で売却した時に見込まれる推定額を示した。最後に、各商館長が受け取った物資とその売却推定額の合計を示したが、問題はこれらを単純に加算して 17 年間の総計とできるかということである。受領書には、当然予測される前任者の繰りだし分と商館長が任期中に受け取った分とが区別して明記されていない。インドから毎年 1 回輸送される香料の場合には積み残しということは考えられないが、商館での資金・物資を任期中に完全に使い切り、売却できない残高がでてくるはずであるから、これを無視して単純に加算することはできないことになる。しかも、いわゆる支出分は、香料の代金のみならず、他の商品の買い付け、その他の用途に利用されているはずであるが、それらは全く不明である。したがって、厳密には各商館長の任期中の収支状況しか把握できないことになる。

しかしながら、3 度にわたって商館長を務めたロウレンソ・モレノの場合、1510 年 10 月から 1516 年 2 月までの収支と 1517 年 1 月から 1518 年 1 月までの収支がひとつにまとめられているので、その 6 年 6 カ月という比較的長い期間の収支状況を検討してみるならば、ある程度コーチン商館全体の活動が把握できよう。

この期間、商館長ロウレンソ・モレノは、胡椒 9 万 2,908 キンタル (年平均 1 万 4,294 キンタル) を含め 合計 10 万 44 キンタルの香料を買い入れた。その金額は 31 万 5,975 クルザード (年平均 4 万 8,611 クルザード) と推定できる。他方、貨幣・貴金属 20 万 1,350 クルザード (年平均 3 万 977 クルザード) のほかに、銅 32 万 1,576 クルザード (年平均 4 万 9,473 クルザード) を含め鉛・鉛丹・水銀・明礬の合計 38 万 5,374 クルザード、合せて 58 万 6,724 クルザード (9 万 2,652 クルザード) を受け取っている。香料代金との差額は、27 万 7,497 クルザード (年平均 4 万 165 クルザード) とここだけの計算ではかなり資金的に余裕がみられる。

品目別でも、銅が 2 万 6,798 キンタル (年平均 4,123 キンタル)、金額にして 32 万 1,576 クルザードで、量・金額ともに最も多く、この銅だけで全収入の 54.8% を占め、貨幣・貴金属の合計 20 万 1,350 クルザード、34.3% を上回っている。これで見ると、ロウレンソ・モレノの任期中のコーチン商館は年間平均 4,123 キンタル、金額にして 4 万 9,476 クルザードの銅を受け取ったことになるが、これは 1 万 6,492 キンタルの胡椒を買い入れることができる量であり、これは 17 年間の年平均購入量 1 万 3,800 キンタルを上回る数字である。

また、初代商館長ディオゴ・コレイアの場合、繰り越し分はないわけであるから、収入 17

表 VII コーチン商館におけるヨーロッパ産品の輸入量とその推定額

上段：キンタル  
下段：クルザード

商 館 長	貨 幣	金	銀	銅	鉛	鉛 丹	水 銀	明 礬	合 計	年平均
デ ィ オ ゴ ・ コ レ イ ア <sup>15)</sup>		—	—	2,982	1,441	171	—	781		
1502年2月-1506年1月	113,965			35,784	8,646	3,420		11,715	173,530	43,385
ロ ウ レ ン ソ ・ モ レ ノ <sup>16)</sup>		120	812	2,334	1,197	109	75	—		
1506年 -1507年	93,067	7,800	5,278	28,008	7,182	2,180	3,750		147,262	73,633
ア ン ド レ ・ デ ィ ア ス <sup>17)</sup>		18	412	7,920	1,534	983	640	314		
1507年12月-1509年12月	124,035	1,170	2,678	90,504	9,258	19,660	32,000	4,710	284,015	142,008
デ ィ オ ゴ ・ ペ レ イ ラ <sup>18)</sup>		1	93	7,262	1,725	787	619	—		
1509年10月-1511年2月	38,645	65	605	87,144	10,350	15,740	30,950		183,499	137,624
ロ ウ レ ン ソ ・ モ レ ノ <sup>19)</sup>		33	16,120	26,798	3,883	—	810	—		
1510年10月-1516年2月	94,425	2,145	104,780	321,576	23,298		40,500		586,724	90,265
デ ィ オ ゴ ・ デ ・ ヴ ァ ス コ ン セ ロ ス <sup>20)</sup>		215	2,221	2,029	—	—	—	101		
1515年1月-1518年1月	2,325	13,975	14,437	24,348				1,515	56,600	48,514
ロ ウ レ ン ソ ・ モ レ ノ										
1517年11月-1518年11月										90,265
合 計	446,462	387	19,658	49,325	9,789	2,050	2,144	1,196	1,431,663	84,214

表 VIII カナノール商館におけるヨーロッパ製品の輸入量とその推定額

上段：キンタル；下段：クルザード

商 館 長	貨 幣	金	銀	銅	鉛	鉛 丹	水 銀	明 礬	合 計	年平均
ゴ ン サ ロ・バ ル ボー サ <sup>21)</sup> 1502 年 -1505 年	9,932	—	—	32 384	70 420	20 400	166 8,300	459 6,885	26,321	8,774
ゴ ン サ ロ・メ ン デ ス <sup>22)</sup> 1508 年 9 月-1512 年 12 月	119,259	33 2,145	56 364	3,580 42,960	402 2,412	204 4,080	762 38,100	481 7,215	216,535	50,949
ペ ロ・ホ ー メ ン <sup>23)</sup> 1513 年 -1516 年	4,746	—	6 39	990 11,880	215 1,290	124 2,480	46 2,300	312 4,680	27,415	9,138
エイ トー ル・ロ ド リ ゲ ス <sup>24)</sup> 1516 年 1 月-1517 年 1 月	—	12 780	100 650	—	15 300	15 300	—	—	1,730	1,730
合 計	133,937	45 2,925	162 1,053	4,602 55,224	687 4,122	363 7,260	974 48,700	1,252 18,780	272,001	24,178

表 IX ゴア商館におけるヨーロッパ製品の輸入量とその推定額

商 館 長	貨 幣	金	銀	銅	鉛	鉛 丹	水 銀	明 礬	合 計	年平均
フ ラ ン シ ス コ・コ ル ビ ネ ル <sup>25)</sup> 1510 年 11 月-1515 年 12 月	—	3 195	1,428 9,282	4,620 55,440	422 2,532	301 6,020	162 8,100	145 2,175	83,744	16,474
フ ラ ン シ ス コ・コ ル ビ ネ ル <sup>26)</sup> 1518 年 9 月-1521 年 11 月	20	—	73 475	5,107 61,284	197 1,182	—	—	355 5,325	68,286	22,147
合 計	20	3 195	1,531 9,757	9,727 116,724	619 3,714	301 6,020	162 8,100	500 7,500	147,280	18,034

表 X カリカット商館におけるヨーロッパ製品の輸入量とその推定額

商 館 長	貨 幣	金	銀	銅	鉛	鉛 丹	水 銀	明 礬	合 計	年平均
ゴ ン サ ロ・メ ン デ ス <sup>27)</sup> 1513 年 10 月-1515 年 10 月	33,887	—	82 533	1,078 12,936	144 864	24 480	23 1,150	45 675	50,525	25,263

万 3,530 クルザード、香料支出 9 万 9,439 クルザード、差し引き 7 万 4,091 クルザードで、ここでも資金的に余裕のあることを示している。他の商館長の場合も、ディオゴ・デ・ヴァスコネロスを除き、その任期中の収入（おそらく前任者からの繰り越し分も含まれるだろうが）は、香料支出の 2 倍前後となっている。

このことは、カナノール、ゴア、カリカットの商館にもあてはまる。というよりは、収入が香料支出を数倍も上回っている。例えば、カナノール商館長ゴンサロ・メンデスの場合をしてみる。前任者の受領書が欠落しているが、この商館にしては取引が活発で、4 年 3 カ月間に 21 万 6,535 クルザードの収入があり、2 万 202 キンタルの香料を買い付けるために 4 万 4,152 クルザードを支出した。残高は 17 万 2,383 キンタルと多額になるはずだが、後任のペロ・オーメンの収入はわずか 2 万 2,415 キンタルである。この 17 万 2,383 キンタルがどこに行ったかは不明である。

ゴア商館でも、2 年 9 カ月の空白期間を置いて 1510 年 11 月すなわち アルブケルケがゴアを征服した直後から 1521 年 11 月まで都合 8 年 3 カ月間に香料を 9,136 クルザードしか買い付けていないが、単純計算では 14 万 7,280 クルザードの収入を記録している。また、ただ 1 件しか受領書のないカリカット商館の場合も同様で、商館長ゴンサロ・メンデスは、香料支出 1 万 4,852 クルザードに対して 5 万 525 クルザードの収入があった。

この収入面のはっきりしない部分がある程度明らかにしてくれるのが、本国からインドにやってきた船舶の積荷明細である。次に、3 船の主な積荷内容とその推定金額を示す。

#### 1. サンティアゴ号<sup>28)</sup>

1506 年 4 月、16 隻からなる船団を率いたトリスタン・ダ・クーニャの旗艦サンティアゴ号は、リスボンを出港、翌 1507 年 8 月カナノールに到着した。

積荷内容		金額	
通貨			2,473 クルザード
銀	475 マルク 1 オンス半		3,088 クルザード
金	8 マルク 1 オンス 5 オイタボ 1/2		520 クルザード
銅	1,206 キンタル	6 アラテル	14,472 クルザード
鉛丹	182 キンタル 2 アロバ	27 アラテル	3,640 クルザード
水銀	307 キンタル 2 アロバ	7 アラテル	15,350 クルザード
鉛	256 キンタル	9 アラテル	1,536 クルザード
		合計	41,079 クルザード

#### 2. ライーニャ・ベレン号<sup>29)</sup>

1507 年 4 月ジョゼ・デ・カストロの率いるインド船団の一隻ライーニャ・ベレン号は、以

下の商品を積み込み、そのうち貨幣をコーチン商館長アンドレ・ディアスに、金属をカナノール商館長ロポ・カブレイロに引き渡している。

積荷内容		金額
貨幣		3,000 クルザード
銅	550 キンタル	6,600 クルザード
水銀	225 キンタル	24 アラテル
鉛	279 キンタル	1 アロバ
丹	25 アラテル	5,580 クルザード
合計		26,430 クルザード

その他、衣服・布地として（但し、価格は不明）

フランス産敷布	797 ヴァラ
ブルターニュ産敷布	1,096 ヴァラ
国産敷布	3,541 ヴァラ
フランス産タオル	194 ヴァラ

### 3. ナザレ号<sup>30)</sup>

1516年ジョアン・ダ・シルヴェイラに率いられた5隻からなるインド船団の1隻、ナザレ号は、航海中に沈没したルス号の積荷を引き継いでインドに到達した。

積荷内容		金額
貨幣		4,467 クルザード
銀	3,048 マルク	19,812 クルザード
銅	2,514 キンタル	2 アロバ
	6 アラテル	30,168 クルザード
鉛	602 キンタル	1 アロバ
	8 アラテル	3,613 クルザード
水銀	2 キンタル	3 アロバ
		138 クルザード
明礬	497 キンタル	20 アラテル
		7,455 クルザード
合計		65,653 クルザード

その他、主な積荷（但し、価格は不明）

珊瑚	112 キンタル	
ジェノヴァ産ビロード	1,440 コヴァド	
フィレンツェ産緋色布地	332 コヴァド	
ロンドン産赤布地	605 コヴァド	
オランダ産布地	95 コヴァド	
合計		2,472 コヴァド

わずか3件の事例からの結論であるが、これら3隻の共通点は、貨幣の量は9,940クルザ

ードときわめて少なく、総額 13 万 3,162 クルザードの 7.5% に満たないことである。また、ここでも銅の積荷に占める割合が高く、6,784 キンタル、金額にして 5 万 1,190 クルザードで総額の 38.4% を占める。1 船平均の積荷価は 3 万 3,290 クルザードとなり、これは胡椒 1 万 1,097 キンタル分に相当し、年間平均買い付け量の 84.5% にあたる。

いま、一船当りの積荷価を 3 万 3,000 クルザードとすると、1501 年か 1521 年までにインド到達した船舶数は年平均 11 隻であるから、年間の積荷価合計は 36 万 3,000 クルザードとなる。ボクサーによれば、当時の年間香料輸入量は 3 万～5 万キンタルである<sup>31)</sup>。仮りに最大限 5 万キンタルをすべて胡椒として計算すると、香料支出は 15 万キンタル、つまりインドに送った金額の半分を香料買い付けにあてていることになり、これはきわめて大雑把だが、コーチン商館の収支バランス 2:1 に一致していることになる。しかし、これはあくまでも机上の試算にとどめておかねばならないであろう。

最後に、コーチンでの具体的な取引内容を示す事例<sup>32)</sup>を検討する。1520 年ジョルジュ・ブリットの船団に加わってコーチンに向けたアンドレ・ディアスは、本国のインド商務院から貨幣 2 万 513 クルザーの他に、以下の商品を積み込んでインドに向けた。

銅	3,356	キンタル		
水銀	28	キンタル	3 アロバ	24 アラテル
珊瑚	未加工 35	キンタル	2 アロバ	21 アラテル
	加工済	12,1433	オンサ	

コーチンに着くと当地の商館からさらに 3,077 クルザードを受け取るとともに、以上の商品を 5 万 2,440 クルザードで売却した。つまり、このカピタン・モールは、合計 7 万 6,030 クルザードを手にし、その資金をもとに以下の商品を購入した。

胡椒	30,322	キンタル	9 万 966	クルザード
肉桂	83	キンタル	291	クルザード
生姜	108	キンタル	162	クルザード
カルダモン	42	キンタル	336	クルザード
砂糖	400	ファルド		不明

受領書は量目を記するのみで、推定によるほかないが、購入額は 9 万 1,494 クルザードで資金をかなり越えるが、いま胡椒価格を 2.5 クルザードとすると、7 万 5,805 クルザードとりなほば手持ちの資金と購入額は等しくなる。

#### 註

1) Carta de Quitação del Rey Dom Manuel (以下、C. Q. と略記) 130.

- 2) C. Q. 455.
- 3) C. Q. 64.
- 4) C. Q. 713.
- 5) C. Q. 657.
- 6) C. Q. 721.
- 7) Godinho, *Descobrimientos* I, pp. 52-53. D. F. Lach も、1505 年におけるインドの香料価格表を示しているが、生姜の 0.75 ダカットは安すぎる。なお、1 cwt 当り 1 ダカットは 1 キンタル当り 1 クルザードと等価と考えてよい。D. F. Lack, *Asia in making of Europe*, vol. I, p. 110.
- 8) C. Q. 289.
- 8) C. Q. 300.
- 10) C. Q. 526.
- 11) C. Q. 763.
- 12) C. Q. 239.
- 13) C. Q. 694.
- 14) C. Q. 299.
- 15) C. Q. 130.
- 16) C. Q. 455.
- 17) C. Q. 64.
- 18) C. Q. 713.
- 19) C. Q. 657.
- 20) C. Q. 721.
- 21) C. Q. 289.
- 22) C. Q. 300.
- 23) C. Q. 526.
- 24) C. Q. 763.
- 25) C. Q. 239.
- 26) C. Q. 694.
- 27) C. Q. 299.
- 28) C. Q. 518.
- 29) C. Q. 457.
- 30) C. Q. 233.
- 31) Boxer, *op. cit.*, p. 59.
- 32) C. Q. 652.

## 結 び

以上、「国王ドン・マヌエルの受領証」を中心に、インド洋進出間もない 1502 年から 1521 年までのマラバルにおけるポルトガル商館の活動について検討してきたが、その結果を要約して結びとしたい。

考察の対象としたコーチン、カナノール、ゴア、カリカットの 4 つの商館のうち、コーチン商館が香料の買い付け量、本国から受け取った積荷量の上からも最も重要で、少なくともマス

エル 1 世期 (1495-1521 年) においては首都ゴアの商館も取るに足らぬ存在であった。

1502 年から 1519 年までの 19 年間にポルトガル人がこれらの 4 つの商館を通じて買い付けた香料の総量は 27 万 1,892 キンタル、年平均 1 万 5,993 キンタルで、金額にして 80 万 8,955 クルザード、年平均 4 万 7,586 クルザードとなる。検討した胡椒、肉桂、丁子、生姜、肉豆蔻、豆蔻花の 6 つの香料のうち、胡椒の取り扱い量が 88.1% と圧倒的に多く、次いで生姜の 7.7% この 2 つで全体量の 95.8% を占める。生姜に関しては、コーチン商館の取り扱い量は少なく、取引の中心はカナノール商館であった。年間の平均買い付け量が最も多かった時期は、1509 年 10 月から 1511 年 2 月までで、同時期のカナノール商館を合すると 2 万キンタルを越える。16 世紀初頭におけるアジアの年間香料生産量は約 20 万キンタルであるから、マラバルの商館はその生産量の約 10 分の 1 をケープ・ルートでヨーロッパに輸送していたことになる。

ところで、同時代のポルトガル人航海者ドゥアルテ・パシェコは毎年 3 万~4 万キンタルの香料がケープ・ルートでヨーロッパに送られていた<sup>1)</sup>と云い、C. R. ボクサーによれば、16 世紀最初の 30 年間にポルトガル人が本国に輸送した香料は 4 万~5 万キンタルに達していた<sup>2)</sup>。もちろん、マラバルの商館の取引量がポルトガル人がアジアで買い付けた香料のすべてであるわけではないが、この両者の数字に 2 倍前後の開きがある。今後、マラバル以外の商館活動の解明が必要となるところである。

次に、香料買い付けの対価物に関しては、その主たる商品は、貨幣(金貨・銀貨)・貴金属、銅、鉛、水銀、鉛丹、珊瑚、各種の布地である。史料の制約上、各商館長が在任中に受け取った分を単純に加算して合計することはできないため、本国から輸送された物品の総計を知ることにはできない。しかし、1510 年から 1517 年まで務めたコーチン商館長の事例に限定すると、本国から受け取った物品のうち銅が年平均 4,123 キンタル、金額にして 4 万 9,473 クルザードと最も多く、金額的には受け取り分全体の 54.8% を占め、2 番の貨幣・貴金属の 34.3% を上回っている。しかも、この銅だけで年間の香料支出をまかなえる額に相当する。このように、少なくとも 1521 年までは銅が香料の対価物として最も重要で、ヨーロッパの銀が南ドイツによって供給されている時代にはまだ銀は圧倒的な力を持ち得なかったように思われる。

この期間の対価物の総額 58 万 6,724 クルザードを同期間の香料支出 31 万 5,975 クルザードと比較してみるならば、残高は 27 万 750 クルザードと、支出額に近い数字を示している。この傾向は、他の商館長、商館にもみられ、香料を買い入れる資金だけで見ると、かなり余裕があるように思われる。しかし、その残金がどの用途に用いられたかは不明であるが、他商館の買い付けのほか、おそらく各地の商館や艦隊の維持に用いられていたであろう。当時の王室財政は慢性的な赤字に悩まされ<sup>3)</sup>、本国にそれほどのゆとりはなかったはずで、事実、少なくとも 1512 年まではインド洋での略奪・海賊行為による収益がインド帝国の大きな財源にな

っていたと言われる<sup>4)</sup>。しかし、この問題は、本国の香料交易の独占機関であるインド商務院の収支状況、国家財政全体を検討した上で解明されねばならぬ課題である。

最後に、本文で検討できなかった商館長の出自について言及して結びとしたい。彼らはみな王室の家臣、その大部分は下層の騎士身分である。マラバルの商館長たちは香料の国王独占体制の下で国王から年俸を受ける、いわば官僚として、騎士という貴族身分にありながら現地の状況に通じ商取引にたけていた。彼らこそはまさに、騎士・商人型とも言うべき人間類型に属する初期ポルトガル海外進出の担い手であった。

#### 註

- 1) Duarte Pacheco, *Esmeraldo de Situ Orbis*, Liv. IV, cap. 3.
- 2) Boxer, *op. cit.*, p. 59.
- 3) 本国は北アフリカに莫大な戦費を投入することを余儀なくされ、早くも1500年パドランと呼ばれる公債を発行しなければならなかった。F. de Almeida, *op. cit.*, pp. 379-381.
- 4) Godinho, *Descobrimientos* II, p. 48.



**O comércio português de especiarias no reinado de D. Manuel**  
**—actividades comerciais das feitorias em Malabar—**

*Norio KINSHICHI*

Este artigo tem como fonte principal nas cartas de quitação del Rey D. Manuel e procura elucidar as actividades comerciais das feitorias estabelecidas em Malabar. Através dos empórios portugueses compravam pimenta, cravo, canela, gengibre, noz moscada, massa e muitas outras coisas orientais.

Durante o reinado de D. Manuel, os feitores obtiveram cerca de 272 mil quintais de especiarias, dentre as quais a pimenta ocupou o primeiro lugar registando 88,1 por cento do total, a seguir a gengibre somente 7,7 por cento. No mandato do feitor Lourenço Moreno (1510-1517), a quantidade média anual da compra de especiarias montou a cerca de 20 mil quintais, que corresponde a 10 por cento de todas as especiarias produzidas anualmente na Ásia.

Quanto às mercadorias importadas da Europa, o cobre foi a mais importante, seguido por espécies de ouro e prata. Outras foram chumbo, azougue, coral, vermelhão, panos europeus, etc.

A importação anual do cobre, durante a época em que feitor era L. Moreno, elevou-se a 4.123 quintais, com que se podia comprar 16.492 quintais época em que feitor era de pimenta. Os valores das mercadorias recebidas foram maiores do que as despesas de compra de especiarias. Mas, não podemos saber para que se despendeu o resto.

Finalmente, no que se diz respeito ao estado social dos feitores, foram cavaleiros da casa real. Apesar de serem cavaleiros, eles eram comerciantes inteligentes que conheciam bem a situação da Ásia. Neste sentido, estes feitores, que mantinham o estado da Índia, poderiam ser chamados cavaleiros-mercadores, formando assim um novo tipo social.